

特42

6:

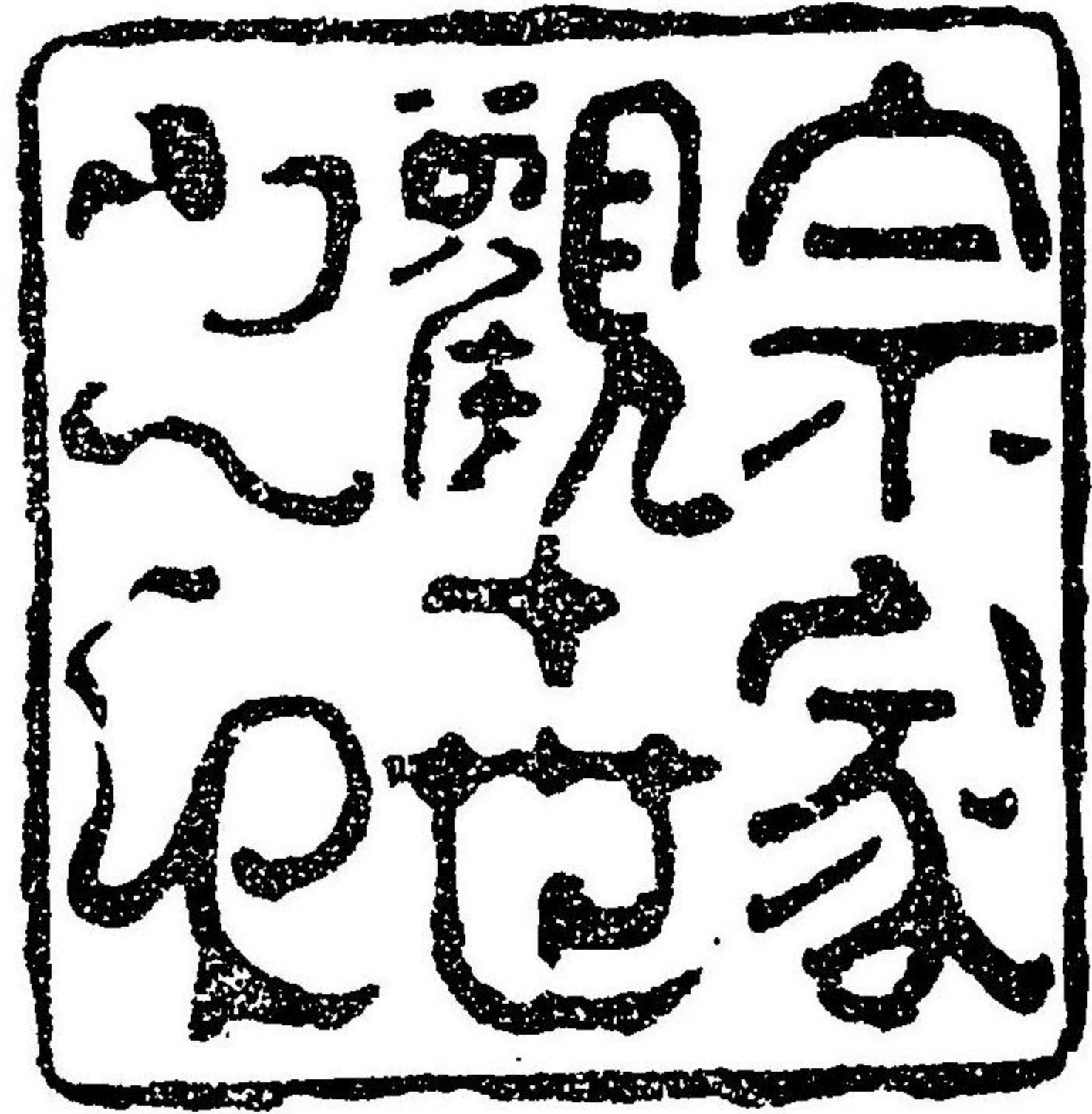
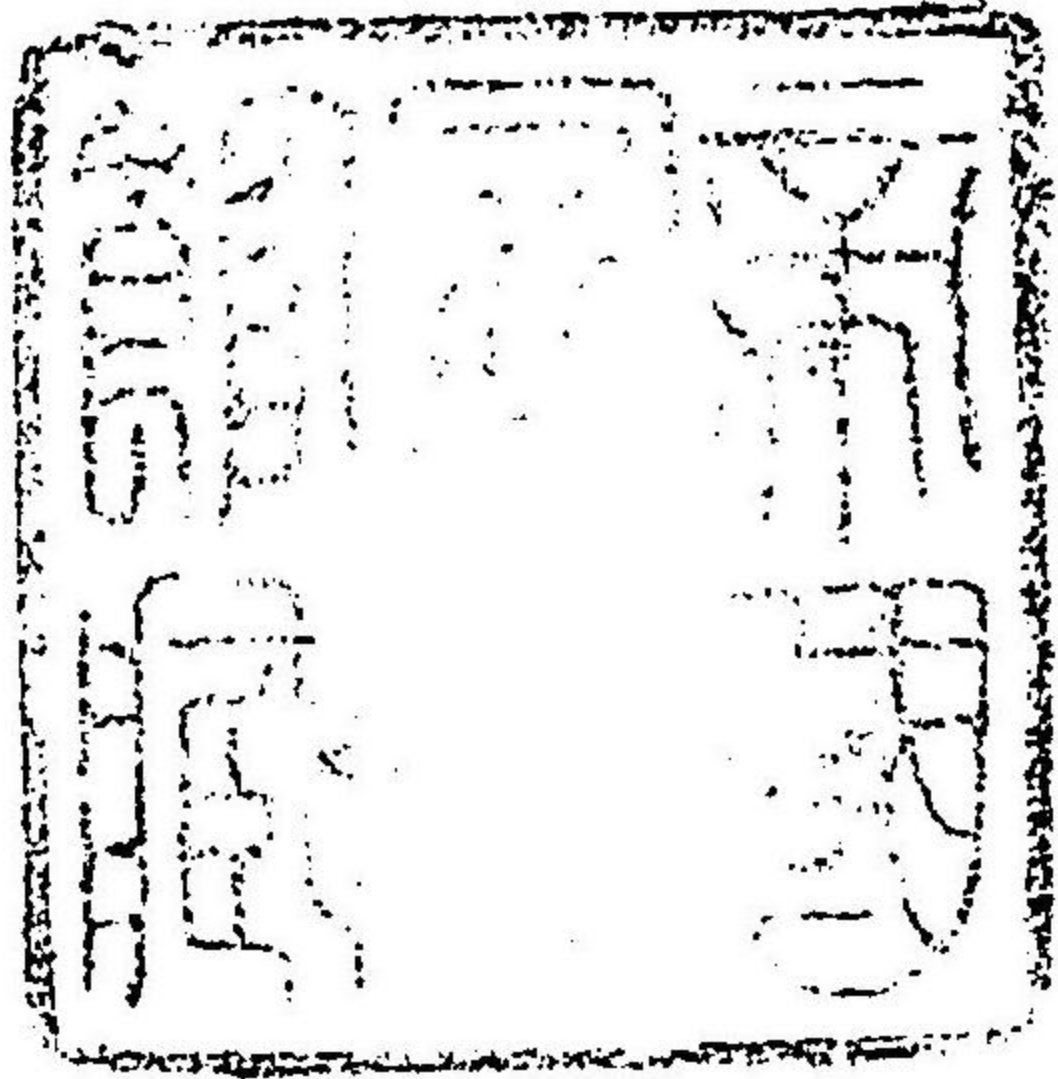
445

融 玉 葛 揚 貴 妃 寔 威 白 樂 天

四

255

519



明治
45. 4. 24
内交

季子知 扇 餘

白樂天

後シテ 佳吉明神

ワキレ 白樂天

十月 二番目

實威

後シテ 實威

ワキ 使僧

八月 三番目

楊貴妃

シテ 楊貴妃

ワキ 勅使

九月 墨目 墨三番目

玉葛

後シテ 里香内侍

ワキ 僧

八月 五番目

韃

前シテ 老翁 大尺

ワキ 僧

白樂天

上字カニ 半開

校是の唐の大家の寮客白樂

天との秋事也 拙も是より東よ

當つて國ありのなと目今と名つ

々。志波去よわたり。目今の智恵を

かれの真旨は任を吸へ今海路よ

顔作 舟漕出づ 具はまの

其方乃國と尋んウヤ東海の收路
 ちるや行舟乃く。終入日の影
 疎る雲の旗手乃天津空月まぶ
 出る其方より山又えうめり程も
 かく日本ニッポンの地も急はきりく
 海路カイロとて急作程は早人のや日
 本ニッポンの地も急はきりく

日本ニッポンのやうと諷めざるとな作
 志らぬひら飛雲の海の朝ほらま
 身乃ちゆる氣を飛ニッポン巨水優
 して碧浪天をひり都と詩き
 ちんをいが扁舟は楫をうのをある
 湖の煙乃浪の上かくやとねむら
 けり意面白の海はやあヤ松浦る

西よぶあま有明乃上あ月の入雲も
 浮きも雲降みなくたぐひ妙妙あ
 唐の海空の如唐土の船路乃
 旅もをからて一歩海りと岡からよ
 月も程あまから殊うかく早月月れ
 萬里の波濤とまの目本なる地よ
 毛の毛髪よ小舟一艘浮つりてん

漁翁也キヨオウからあまき成る目本なる者ら
 けしんヒテ是の目本の漁翁とてん所か
 唐の白樂天もくまし使をあ
 け上キカレけあお始く此よ渡りたるを白
 樂天とてその行の故きてあも境
 其身の漢土の人あま其かあはよる
 て目本のあまの隠れあまきわがやあり

舟車

舟車

^上幸^カル^ル 是^レ其^ノ基^ニ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下テ^ハ其^ノ中^ニあ^リま^りを^シて^モ思^ハふ^レ也^ニ
^下日本^ノの^智恵^ヲと^シて^モ樂^マす^レり^也
^下臨^ミて^モ其^ノ中^ニあ^リま^りを^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下西^ノと^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下其^ノ中^ニあ^リま^りを^シて^モ也^ニ
^下今^ノ也^ニと^シて^モ松^ノ浦^ノ舟^ノ

^下仲^ノも^シて^モ又^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下人^ノを^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下ま^りを^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下は^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下よ^シて^モ其^ノ固^キゆ^リを^シて^モ也^ニ
^下其^ノ中^ニあ^リま^りを^シて^モ也^ニ
^下其^ノ中^ニあ^リま^りを^シて^モ也^ニ

昔の嚴の音はわらわら多し
 今も自雲華はゆるの腰を
 めぐむる自く日本のもた
 具公よ昔交する名ほあはく
 てまぬく出の事とせむか
 やあ其方き賤し徳為陣がく心
 あは歌予はらぬ其方ぬ中味

人ぞ人ぞ人ぞあはるま
 者ありはれ多し讀み人向の
 三子限るら念と念る物毎
 多し短あは物と引まやま
 生る物と世は多敷富
 道も和事と詠む其
 和國よれ今 證歌多し 花は

帝嘗賦^{ナリ}及^キ有^ル賦^ト題^ト唐^ノ書^ノ如^ク日^本書^ノ多^ク也^ニ頌^ム之^ヲ稱^ス也^ト大^和書^ノ也^トを
 もかみ^テの^ノこ^トく^ク讀^マり^テ抑^マら^ズ以^テ
 之^ノ多^クを^レよ^ク念^シた^ル故^ニ乎^トの^ノ孝^子鑑^ト
 天皇^ノ御^宇乎^ハ又^ハ大^和國^ノ高^天寺^ト
 ま^ニま^シび^テ人^ノの^ノ志^ヲを^レ稱^スん^ノの^ノ事^ヲは^レ行^ハは^レま^ス
 梅^ノ字^ノ乎^ハ来^リて^ハ傳^ヘき^クを^レ以^テ初^メ

際^毎朝^来来^テ不^レ相^違本^十柄^した^ク文^字
 字^ノ乎^ハ寫^シて^ハ具^々と^シて^ハ三^十一^ノ文^字
 乃^ハ詠^フ乎^ハの^ノを^レ初^メ陽^ノ初^陽
 若^クあ^らば^ハた^毎日^毎来^テハ^レは^レて^ハや^りて^ハ
 其^ノ多^ク乎^ハ柄^シと^シて^ハえ^んつ^らる^る嘗^トの^ノ詳^ト
 を^レ始^メと^シて^ハ乎^ハの^ノ外^多乎^ハ類^ノ乃^ハ人^ノ
 した^りて^ハ乎^ハを^レ以^テ初^メた^りて^ハ多^ク

ありし海乃濱のまゝ乃敷くは
 ともきる物行まも多よ女あり
 空や和國の風俗のく心方きる海
 空の空有種ま習ひの和 申和
 國のもて遊び和教をえらる舞
 舞の曲其をいを顯らん 引まや
 まくろ遊びとをせりく 和教

誰かてても空をいれ我ら
 此舞樂の鼓を浪の音笛龍
 乃吹るまをき舞人ゆけ舞が老の
 あらふとよたつて舞海は海ひつ海
 音楽とまも や 和 舞 音 笛 龍
 動し萬代 中 未 序 出 端 山 陰 の う つ ら
 水の舞は海 地 復 ら は る ま の 海

けまきし唐船の愛より漢が又端
 ときりの実方経や神ときまらざる
 かなや神と君が仲のうごうぬ國を
 ひきまき

實感

文西方の十萬億を遠くはる道
 ながら心も己身乃強陸の國貴
 賊群集れ称名の聲 日と夜と
 乃法の場 空もまきこは橋が平
 捨る ちるは銀あり 跡もま
 獨りあほ佛乃空めと尋ねる

Shan/127

松のく舞るは傍の場を知らぬ毛
 心多誓言の綱よも入まや多人の志ら
 ぬまもも渡さるや付國の舟
 浮きも海ま道とやかく
 遠はまの孤雲の上を空を飛来
 落日の前あらたきやも又雲
 雲のまて分や鐘の音人志のき

のまのふはくぬ糖園もとて
 ばあまなまもあま老の後の
 零もつたひ法の場はのろあからえ
 や林雲もきん入念称名の舞らちよぬ
 接取の光明曇らぬ若老眼の通
 路あほまつくぬああらんよしくも
 こし海くた愛とまひりまをうるま

トモもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
毎日の祈りもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
志乃者ともあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
のりもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

鄙人あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
こまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
偏りもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
がまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも
あまのこもあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

安樂國よ生母かよひに後喜と
あはれはしるる執乃圖像のちよ
又改めくあいらんり口借社らよ
早白 完く菊乃申あはれの至極まのち
あからあらしあはしきのあはれあはれ
しあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

今よのあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれ

...

...

引^{ワキ}れ^ハ平家乃侍^{サムラヒ}ら^シあ^テの^ハ将^シを
軍物語^{イクサノモノ}の^ハ益^{ユク}望^{ノゾミ}は^シの^ハ名^ナを^シ業^ノ入^ル
ら^ハは^シま^シに^シ其^ノ威^イを^シは^シ前^ノあ^リ
池^{イケ}水^ノさ^シく^ハ髯^{ヒゲ}鬚^ノも^シ洗^{ソウ}は^シれ^ハあ^リ
が^ハあ^リま^シ執^{シツ}心^{シン}跡^{アト}も^シあ^リ今^{イマ}も^シあ^リ
夏^{ナツ}の^ノ人^{ヒト}よ^ハあ^リま^シあ^リの^ハあ^リま^シあ^リ
中^{ナカ}の^ハ儲^{タカ}も^シ人^{ヒト}よ^ハあ^リま^シあ^リ
ツ^ツ深^{フカ}山^{ヤマ}

木^キ乃^ノ其^ノ梢^ノと^ハ分^ワる^ハえ^ハは^シら^ハし^テ梅^{ウメ}の^ハ花^{ハナ}
下^{シタ}頭^{カビ}も^シた^ハる^ハ老^{オシ}來^キと^ハう^ハれ^ハは^シ後^{ノチ}を^シま^シ
下^{シタ}カ^カも^シ梅^{ウメ}の^ハ威^イの^ハ昔^ノと^ハあ^リま^シつ^ツ物^{モノ}
禮^{レイ}人^ニ乃^ハう^ハ人^{ヒト}と^ハ思^{オモ}ひ^ハま^シあ^リま^シあ^リと^ハ成^ナ
ま^シる^ハあ^リま^シあ^リま^シあ^リ梅^{ウメ}の^ハ威^イの^ハ昔^ノと^ハあ^リま^シつ^ツ物^{モノ}
其^ノ出^イま^シる^ハあ^リま^シあ^リ種^{シユ}の^ハ威^イ
が^ハ幾^{ナニ}も^シあ^リま^シあ^リ幾^{ナニ}も^シあ^リま^シあ^リ途^チよ^ハあ^リま^シあ^リ

鬼き此世にまひりて 早カル 物執心乃
圖書のせよ 早 二百人歳乃程のさまを
引うひまをやらで 藤原の 早 池乃あぶ
後 早 まると 早 かく 晝 早 も 早 わらて心乃圍の
夢 早 たなく 早 現 早 た 早 あ 早 き 早 思 早 の 早 ぞ 早 の 早 こ
藤原乃 常葉の 霜乃 霜さひひく人
も 早 多 早 夢 早 彼 早 初 早 子 早 あ 早 ら 早 け 早 出 早 づ 早 くる 早 突 早 感

つ 早 夢 早 傳 早 給 早 あ 早 り 早 な 早 り 早 世 早 語 早 も 早 け 早 る
の 早 一 早 と 早 え 早 夢 早 は 早 夢 早 夢 早 夢 早 夢 早 夢 早 夢 早 夢
藤原乃 池の 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま 早 藤 早 乃 早 池 早 乃 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま
夢 早 乃 早 夢 早 の 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま
夢 早 乃 早 夢 早 の 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま
夢 早 乃 早 夢 早 の 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま
夢 早 乃 早 夢 早 の 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま
夢 早 乃 早 夢 早 の 早 邊 早 まで 夢 早 の 早 ま

奉りて交はるはまのほもあし行月の
老りとせは日雲のあはる鐘をあらして
あもまから南無阿弥陀仏あま
まの極樂世界よまあま
あまの苦界と都て論也乃古銀
満るの放たの心くくや可也
不退の可命の無量壽佛あ頼

しやの相續する人の命は性
生れしあまの心は明是夜命
あまの心は其行此義を以て
乃故にあまの性生さうへと也
ありがてあまのあまらあ
たの地はあまのあまらあ
あまのあまらあ甲胃をあまらあ

まげらふ 聖木乃人志まぬやと志
つゝも 空乃池のまかす海鏡の昔
患乃ねを深くたがせ給ふまよ
是程よまらあつりあつてまを城と余
人志更よ見えまゆきまで 唯上人
乃三明らよ 又も染も跡の雪七
むん鬚白ま老武者あれた 其出

まきあや飛 糖こころまきりあま
月乃光 燈の陰 周らぬよもの
錦乃ひてれはく 前黄白ひ乃鏡
まて金作のたち刀入らるまきぬ
ふれとても 行つ寶乃池の蓮の臺社
たら成まきれもや疑ぬは乃教へ
朽もまぬ人志のま城はほくまあぐらぬ

重らばいづれも シテ 夫 ハ 天 ノ 命 ニ 従 フ 所 ナ 也
即 チ 滅 ス 量 ノ 罪 ノ 見 ル 也 ハ 尚 ホ 必 ズ 然 ル 事 ナ 也
跡 ヲ 留 メ 置 キ 時 ニ 至 ル 事 ハ 必 ズ 逢 フ 途 ニ
手 ヲ 洗 ヒ 去 リ 事 ハ 必 ズ 悔 メ 悔 メ の 物 ト 語 ル
於 テ 先 ニ 首 ヲ 垂 テ 下 シ 乃 チ 死 ス 乃 チ 草 ノ 陰 ノ 野 ニ 乃 チ 露 ト 結 ビ 有 レ 根
語 リ 中 ニ 入 リ 也 ハ 夫 レ 也 ハ 必 ズ 然 ル 事 ナ 也 ハ 必 ズ 然 ル 事 ナ 也

神 ノ 功 ノ 偉 キ 乃 チ 功 ノ 大 キ 手 ノ 塚 ノ 大 キ 高 キ 光 ノ 威 ト
亦 チ 曾 チ 殿 ノ 法 ノ 前 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 核 ト 是 レ 威 ト 社 ト
亭 ノ 異 ノ 乃 チ 曲 者 之 レ 組 メ 首 ヲ 下 シ 乃 チ 入 リ
大 キ 將 ノ 乃 チ 及 ビ 事 ノ 中 ニ 勢 ノ 大 キ 乃 チ 及 ビ 事 ノ 中 ニ
思 フ 乃 チ 錦 ノ 乃 チ 真 ニ 業 ト 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ
責 メ 乃 チ 終 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ
乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ 乃 チ 事 ノ 中 ニ

故家當受感^{ヒゲ}之^ニ也^カ有^レ後^ノ或^レら^ハ鬢^{ビシ}
 鬚^{ヒゲ}の白^ク髪^ハた^リま^シら^ハ黒^クそ^レ不^レ審^シあ^レ
 榎^ヒ只^クは^カあ^リの^ミ見^レた^リら^ハん^トて^ハ台^ノ折^レ
 め^ニ榎^ヒま^アり^ノ唯^ニ目^メ又^クは^ハ淺^クと^ラら^ハ
 さら^ニあ^リて^ハあ^ハま^シぎ^ンや^ハあ^ハみ^テ敬^シ
 別^ニあ^リま^シく^ハ作^レま^シら^ハる^ガ實^ニ感^ニ當^リま^シ
 申^シし^テあ^リま^シは^リ軍^ヲと^シま^シは^リ若^ク殿^ト

慮^ラあ^リま^シて^ハは^リま^シる^ガま^シも^ハあ^リ
 あ^ハま^シら^ハる^ガ老^ニ年^ヲと^シて^ハ人^ノ心^ハあ^ハま^シ
 つ^ラま^シん^トも^ハ惜^シま^シら^ハる^ガ鬢^{ビシ}ひ^キを^ハ墨^ス
 ま^シら^ハる^ガま^シの^ハ付^レ飛^ビま^シら^ハる^ガ由^ハ常^ニ
 中^ニ作^レら^ハる^ガ御^ノ儀^ハは^リ洗^ハな^シま^シて^ハ
 片^ハ後^ノ公^ノ入^レ中^ニた^リま^シあ^リま^シる^ガ首^ハと^シま^シち^ハ
 出^レ前^ニま^シて^ハあ^リま^シる^ガ池^ノ後^ノ乃^ハ

岸は際を氷の又より毛陰うつる柳
乃急の枝をわて 氣をわけて茂茂
新柳の髪を梳り氷流て波奮
答乃ひきとあらひてこれ雲を流
まねちきく太なる自髪と成よきり
突かんと惜母をうらぬ短毛かくこそ
なへまればもあらやゆかよて皆感

涙とさう流しきる又突威が錦
の直業とまると私あらぬ程あり
突威都を出し時突威のよ中ス様吉
銀への錦とまると歸るといふ奉子文
あり突威は國都都前乃老あきく作
ひかると年所領まつきられて
は長井よ居佳佳り作ま此度小國よ

下りてゆめをて討死侍るべし
 考後の思出見よとて流るあまを
 守りては赤地の錦乃直登さく
 左に流る魚 烈きと吉亭よもえ
 みぢ葉をわかまつゆま錦きて家よ
 歸りし人も病と續りも此奉
 文の心ありけりまごもる朱買屋の

錦乃枝とせし勢山は翻る今の空
 癖の名を水國の岐よあげがれから
 里よりなる名を事代子方明の月の
 よしから懺悔物語に母を
 懺悔の物語心乃氷の底まよく流る
 を物に伝ふあま 其執心の修羅
 乃道ぬらりくして又愛は木曾とて

まむとたくまゝと手塚あり陽らま
志愛入る入るありつが兵復と
おのる申ありも先をせと手塚乃大島
光威一筋おまを付きと
隙よりて空威と押あらべて組敷を
めめつれをのまき目本一乃剛の者
と軍陣をよして鞍乃前梅は押

仕く首かまきつと捨くまひり
上地
おのれ手塚の太郎空威が弓手よま
かりて茶摺とありと揚て二刀ま
敵を母をもと組と二平あひはよう
と落まるか老武者の悲さき
軍よの志つれり風よちあめ枯木
の力をもれり手塚が志つよある敵

Handwritten mark or signature on the left margin.

Handwritten mark or signature on the left margin.

を。解^{トク}お^カき^ニ落^ルあ^ハひ^テ。終^ニは^ハ首^ヲと^リあ^ハま^ス
お^カき^ニ落^ルあ^ハひ^テ。隆^ニ厚^ク乃^チお^カき^ニあ^ハつ^ク款^ノ
毛^ハか^ハま^ハえ^ハあ^ハま^ハあ^ハとの^ノ影^ノ形^モ南^ノ
無^ク阿^ヲ弥^ヲ陀^ヲ仁^ヲ吊^ラら^シめ^テき^レび^給入^ルあ^ハと
と^カら^ヒて^タび^給入^ル

年三

楊貴妃

我^ガま^ハの^ミ若^クら^ハぬ^キの^ミあ^ハれ^ノ道^ノ道^ノと
い^フく^ト尋^ハね^ん是^レの^ミ唐^ノ書^ノ宗^ノ
皇^帝は^ハい^ハナ^ス方^士あ^ハつ^クぬ^キ相^手
我^ガ君^マつ^りと^タく^まし^まし^ま皮^ノ
も^中ふ^色と^れま^ん一^ノ艶^ヲと^専と
一^ノ鈴^子は^もの^中に^も容^色を^双た^美人^ト

を以たまふ楊家の娘たるよよわ
く其名は楊貴妃と号せし然れ
去子細あつぐらゝ鬼の息めて先ひ
中て作嫁り又帝歎くを珍ひる
ま魂魄乃ありかきと尋て筆れり
宣言は白さどし碧落下黄泉ま
て尋せざるも更し魂魄の有かきと

志らば人の愛し来蓬萊言ふは
の程よ此度蓬萊宮中し毎作
葉ぬかまほりもあつぐらゝ
てまぐたまのありかきる
も浪踏とさきて行舟のほり
又え鳴山乃草のりねたれ
幸世の圃は名なきりく急の程

よ。漢の葉宮のまゝにして。此の可なり。
妻事や。あつた。有し。教の。随つ
る。漢の葉宮のまゝにして。此の。言殿
を。ん。く。て。あつた。邊際も。あつ
た。葉宮のまゝにして。此の。實を
ちり。あつた。漢宮萬里の。結ひ。長
生。瀧。乃。る。模。も。是。の。は。ら。り。

あつた。ら。ふ。ら。ひ。あつた。ら。り。此の。可
なり。又。教の。まゝにして。此の。真
殿。額。の。まゝにして。此の。可
なり。俳。徊。し。て。あつた。由。を。あつた。や。
あつた。首。の。瀧。山。の。まゝにして。此の。
詠。め。あつた。の。まゝにして。此の。あ
つた。今。の。漢。葉。の。秋。の。同。じ。扱。り

あざむる月陰も夜夢がほある猿
のれもら恋めいしやあ唐の
天子乃勅の使が士を遣集たり
玉妃のうちよましまし行唐
帝乃使と使行しよ愛よ来れ
すと九苑の帳を押のきて玉乃
簾をかきつ引出ははせり

雲のびらづら花のうほを
たぐたるは眠のうちよ候を浮入ま
粉給と梨苑一校ををねび
たるよりほひのくもりえまた
夢のくれあ井未央の柳乃及びり
も是よぬいで増るまのるや
乃粉黛の顔色乃あまもさ

楊貴

白

わろくも 女中はんよる梅も
 倉宮様よま 使き時たまも 朝改
 ちねこころの思ひあはれかへかくあらせ
 思ひしはなむひすらする御教ま
 ま今まは命もあやしくみえはせ
 思ひてふきうれ 眞言の御返し
 尋事の御決めとてなむらるる 御
 尋事

君の志念は 清からけりしと
 思ひてふきうれ 痛めさうころ 恨入
 思ひてふきうれ 痛めさうころ 恨入
 乃露の方おもあぬ茶のありさを
 是迄事終ふる 流情よき知たま
 さうよはしらすまはりのくも 思ひ
 あら申この便の凡ね恨めやう今

枝^イが^ハら^フ母^ノと^シ指^シ事^トを^シひ^ル
如^ク傳^ハ入^リ也^ハは^ハあ^ラせ^テあ^レた^トま^レ
る^ムは^ハく^レは^ハま^ハら^シも^ハ母^ノ
流^ル物^ト生^ル死^スの^ハあ^ラひ^トて^シ其^レ
予^ハ馬^ノ鬼^トは^ハ留^マり^タま^シひ^シ仙^ノ宮^ニ
至^リつ^テは^ハ群^ルも^ハ友^トと^シて^ハ獨^ル翅^トを^ハ
予^ハま^シ連^リ理^トも^ハ枝^ト朽^レた^トち^マち^シ色^ト

を^ハ愛^シむ^レた^ト同^シし^ハ心^ノの^ハゆ^ク魚^ノあ^ラせ^テ
終^ニ乃^ハあ^ラせ^テ評^シ頼^ムと^シ語^リ終^ニや^ハ
は^ハら^シが^ハら^シひ^テ出^ル母^ノの^ハ伴^ハひ^タる^ル
は^ハ思^フの^ハら^シま^シは^ハせ^テわ^カら^ハん^ト
その^ハら^シの^ハ種^トを^ハま^シの^ハ行^ハ申^スは^ハま^シ
乃^ハ弟^ノあ^ラり^タあ^ラせ^テ志^スら^ハぬ^レは^ハま^シ
は^ハら^シが^ハま^シま^シか^レや^ハゆ^クを^ハあ^ラ

七

七

まぢり上地 空や魂あ乃嘗のらち
身乃や物あ乃曲女 其か法
みき舞しとて又五か法女 式
神の終彼電裳羽衣乃曲よりや
電裳うい乃曲よりよめる被られ
何れも夢まほろてたぬれや
あまの胡蝶乃まひあらん引られと去

死の終りまほ 髪は二十五分の
らち行まは生者必滅のこそわりのま
ねん生え天と乃五義より須弥乃四作
の極とよお乃千年つひは朽ぬ
いんや老少不容乃法らひ教ま乃

まぢり上地 空や魂あ乃嘗のらち
身乃や物あ乃曲女 其か法
みき舞しとて又五か法女 式
神の終彼電裳羽衣乃曲よりや
電裳うい乃曲よりよめる被られ
何れも夢まほろてたぬれや
あまの胡蝶乃まひあらん引られと去

中のあきたしやウ我もそのかき
 と累乃諸仙たふシ生首のちれそ
 里てかり又人累乃生れまて楊家の
 深窓よ養われいまもまふ人あるま
 君聞されしうまあ出ル店家
 定められ給ひ僧老同完乃かむらひ
 毛縁つまぬまきハいたらシ又此鴻よ

ちりきり海り来まで昔母氷若
 あされまられまら露のたまはらま
 あひたしりおひハ知まらうまむら
 去おくもさる出まシ恨人あるま
 舟の七日乃長君かぬきむつごと
 乃此ハ理の言のたまもあまきくま
 なるけあまハの深乃あまハの舞り

だまの孫の魚子あらひあるよまゝして
 やさ月あれて程にお草かよはら
 ぬおれ乃あうりせの世も人よのう
 ひてまよしそれともものぐさえ
 ぬと者定歌うときまき時きあふ
 こころおれありきれ女上羽衣の曲
序舞ういのまよくまれおううのひそと

下女おまが女上袖うちあける心まるく
 引ひきま首の物語く中盡さる月
 目もうつりまひの志るけんけり
 又降りて暇中てきららとて勅使見
 やこよぬりきれが去あてもりく君
 しの世あひん事も遠く鳩つ
 どり浮世あれたまや首のうれや

陽

序

家^イの^ラお^ハさ^シの^ノ墓^イよ^クま^リま^リて
イ 中 歩 元 元
 う^ウわ^ウま^リま^リま^リ

玉草

早^早見^見之^之諸^諸國^國一^一見^見乃^乃僧^僧之^之公^公我^我此
 稻^稻の^の南^南都^都ま^まの^の心^心く^く香^香の^の靈^靈社^社跡^跡里^里
 か^かく^くお^おま^まめ^めぐ^ぐま^まて^ての^の父^父兄^兄は^はより^{より}初^初瀬^瀬
 ま^まら^らぐ^ぐと^と志^志て^ての^の社^社は^はた^たの^のな^なま^ま
 お^お原^原宮^宮の^のま^まま^まら^らく^く思^思ひ^ひつ^つま^まて
 行^行来^来の^の跡^跡は^は寺^寺か^から^らま^まら^らず^ずに^にあ^あら^らま^ま

無蔵

三輪の枝よ本^イのき^イが程も^イあぐり^イを
 河^ハも^ハ急^ハは^ハま^ハま^ハく^ハま^ハる^ハは^ハま^ハる^ハ
 初瀬川^ハは^ハ急^ハは^ハま^ハま^ハく^ハま^ハる^ハは^ハま^ハる^ハ
 出る^ハま^ハく^ハの^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 初瀬川の^ハ急^ハは^ハま^ハま^ハく^ハま^ハる^ハは^ハま^ハる^ハ
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも

舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも
 舟^ハも^ハ程^ハも^ハあ^ハま^ハの^ハ母^ハの^ハ白^ハり^ハも

舟

舟

うらやま雲よ日影も自ふきくほの
 けりあぢきまかへけけらあめ
 遠空類はあや面自は音のえて里
 つま奥物うちさるれらるれ
 終りの霧まよ殊も夕たれ
 かくては濃はまきりつ
 きんもまろあより四方のあもめ

ありや紅葉のなつたふたに年の
 秋よ急よまきりく 見結しよ
 すまひく作終は際入 借者
 一平乃秋きてゆひまきるうや一本の
 秋のたれごとと書ひる古の人のあや
 一平乃秋きてゆひまきるうや一本の
 秋のたれごとと書ひる古の人のあや
 一平乃秋きてゆひまきるうや一本の
 秋のたれごとと書ひる古の人のあや

お昔の内縁がしりまに後で強ひり

有とての身なつて續きあり

昔もあまれと思ひては跡を能吊らひ

給入ケリ地空や有クニ世を独カホ身乃

霧の身乃ケリ跡申サシくは行

あでサシころ形見カガミもら

思ひのお昔カガミかきくもほホかき

心づくらるまの月ツキお并ナはもう

屋ヤの住スミ居イはうまのウマか扱カ

も絶ツくクあアまマをヲ想オモ志シをヲりリ馬ウマ

人心ココロ乃ノあアらラまマ道ミチ又マタたタちチをヲて

あアまマをヲあアれレのノやヤ舟フネはハ業ノ松マツにニ作ス

松浦マツウラがガ唐土カラキ船フネをヲきキてテはハもうモウろロぞ

かカのノ我ガぬヌらラうウのノ鴻トウをヲ傳ツ歌カくクも

昔

後

行方や行へしとまつし自岐よひさる
離れまはし思ひあはる方もあはかくて
都の中とても我深なる毎乃らち
まはちやうかめさ水鳥の隣よまごふ
ごちりてあしきもあらぬ乃程と
思ひ教きてはまあやまを車の大和
路や唐土にも同あはるしまの寺よ

三

三

初瀬の尾乃鏡のようよの思ひ絶
し一古の人は二度さる本乃枝の立
とて考へるよの人の人言まきあ
逢殿もたあまを思ふ法乃夜窓
よあらら玉昔まよひを照し給や
愛入るよ母の物語まけの候もこまり

三

三

江よりいかにけりてはなるをうれあむと禁
思ひはたふめり初敷川早くも急流
からぬ縁よひらゝくこゝろはまき
かき頼母ふらふ法の人は只ひはひれ
こそぬ縁の霧乃玉のなま各葉も
やらは滅よきりく史梅きも昔の
内侍うりよ顯きおのむきふらふたをひ

三

業因にたきくを照さほらあや目影
光りく大急天悲のちちひある法乃
燈あきさらうのあまのさやがは
の母く憲わるるかまの
玉昔あむ成はとちを尋ひまはらん
あきくも法乃教は海人の心ら
一筋よ其まありてはうららみそ

中

下

てはよ早くもなまじく
相よ是れも都はなまじく
さうなほはなまじく
ひ見せりもと思はる
み成て塩屋の浦に渡り
陸奥のりくもあまじく
てはよ若くもなまじく

心もなまじく
なまじく
やうき塩屋の月も都の
秋もあまじく
なまじく
なまじく
なまじく
なまじく
なまじく
なまじく

塩田神社さしお浦あはれはく
早稲 答すは是ある射及方深あり若
今うは海なるや可の塩取せるか
まや愛の海邊さてもあまの塩取しぬ
誤りたるか射殿 あら何たなや俵
愛さうりていさうあまのくはそ
此可むらうに海に射殿しれ海くひ入

行原院社塩屋の浦は射殿は陸
奥のつ子資の塩取まもたの中は後さ
れたる海邊あまのくは海にさるあ
乃あんの海味さまもくも海さまもあ
愛塩屋の浦あはれ塩取し若もほ
はあまや今に陸奥のちちの塩電を
都の中は後されたるか海及くひ俵

あきあるは離か鳩さう 出んあ秋
離か鳩さう 秋は長常きあみとよ
さらけ所酒宴乃 遊葉様成り可
ふかや月結さくく 実の月乃出
くぞやほるまらう海は森の梢の鳥
乃常然りてきまこ 燈の月影も
こきうは輝るるる 思出られて
秋

何と云ふは西前のき 秋の僧乃法身
子志らあつと 若も雲鳩を葉也現
鳥の宿は油中七樹 僧をたぐ月下
乃門ねまも たるも 山人乃心
今目前乃秋言はあり 実也
し今月はあちる 燈電のく 浦乃
秋もあきまて 秋もあきまて 霧の

籬の傍からわき我を渡り昔乃
跡を陸奥乃ちちの浦わたり
かろらわとあめん 塩を渡り浦を
おの仲まうつされたる謂は物かろら
磯乃天會は言乃 越乃屋乃ちのく
乃ちちの塩を渡り恥中をいふ及んを
おひ此可は塩を渡りうらうら乃程

彼のさつ浦より毛日毎に湖と汲を
爰まで塩を焼く。可生片を乃便
と程を念きたるは相續く歌ふ
人毛あげきつ浦を其ま干塩と
成る油邊はよきまより氷の雨
乃ありのままに屋敷ちりうく松
蔭の月だよまて杖の音のこ

あつ討ありきれり予しそ君まさしく
燦絶し塩漬らうら淋後も交入渡り
改し貫之もあうめく作 実や縁
むきつ月ら交てる塩かまの浦淋後
毛意らうら塩の世迄も志保 老
の復えうらも皆荒昔恋 恋
やくしきうらも教をたがひもあさ

あつ討ありきれり予しそ君まさしく
燦絶し塩漬らうら淋後も交入渡り
改し貫之もあうめく作 実や縁
むきつ月ら交てる塩かまの浦淋後
毛意らうら塩の世迄も志保 老
の復えうらも皆荒昔恋 恋
やくしきうらも教をたがひもあさ

程きり秋ゆらあ 信ニテのこく閑乃こある
みし續たなきたああこよほし清き逢
坂のよき音羽の夢やかくむろ邊カル上ウラ
よりの交えぬあり 極ニ言叶の類フ
次第く乃山並ぬ前くを後ろは
語りもあはしニテの夢の夢の中カ清セイ
閑寺と終極しぬあしうガシカク 極ニ其是

あつとまたる里村乃森のこもあ
それとまるとは終極しぬあしう
秋あれは紅花の青きあは風フ
言行雲乃しもの梢を青き枝の色
今こそ秋と名をかりた雲の影わ
藤の森 フあつとまたる里村乃森のこもあ
つとまたる里村乃森のこもあ

早 野人の秋風 秋はまきまき 鶴鳴あり
深草より本橋は依り人の竹田後鳥狩
毛みくさるや 詠めやあうあう空の
白雲のとも暮をささるまき山乃嶺を来
渾く刀をたのむや成可あるらんあまき
社木さらや塩乃山をまき社を後
うめつらあやうとあふ給入や ぬまよつ

まきも枝の尻袋がまきも葉の西
まきもあつ行くぞ 秋も早く 華を
竹松の尾乃山をまきあり 嵐更け
秋はまきの空のほる月歌のまき
塩時とまきとて 際え松照月よめで
鳥の葉とて 秋乃よばあつ物語のあまよつあ

塩とほして持也田より浦ありまら
きの塩食くめり月と神もち塩の
行は歸る後乃る人の考へてつら
塩量よかき病まで跡もいへん
病をもたきいひなり破れ若ら衣
をかききて。岩根の床はあま
から物も幸物と交りて夢待身の

後寝つあく。世にわたり年々入し物と
又いふは海に浪のつ塩と夜の浦人
乃るよひの月を陸奥のちち浦わも
遠く海に其のちちちちちちちち
我れ也。我輩の浦にちちちちちち
まづうら海に松陰の月を海に
月宮殿乃自夜の神も三五夜中七新

月の色ちり入るる霞の袖
北の桂の枝の影を花のちり入る
糖の蜜もくもく浪の浪七荒面
白や曲水の盃をたたく舞の袖
早稲のちり入るる影も花のちり入る
あはれ分るる霞の影も花のちり入る
あはれ分るる霞の影も花のちり入る

雲の影もくもく浪の浪七荒面
白や曲水の盃をたたく舞の袖
早稲のちり入るる影も花のちり入る
あはれ分るる霞の影も花のちり入る
あはれ分るる霞の影も花のちり入る

地

地

の樹は宿^ノ魚^ノ宿^ノ下^ノ波^ノは
 地^ノもあ^ル秋^ノ夜^ノ鳥^ノま
 地^ノもあ^ル月^ノ影^ノもあ^ル
 地^ノもあ^ル雲^ノと成^ルあ^ル此^ノは
 地^ノもあ^ル都^ノ入^ル夕^ノ初^ノあ^ラ
 地^ノもあ^ルの^ノ面^ノ影^ノもあ^ル乃^ノ面^ノ影^ノ

255
519

復製不許

明治四拾五年三月十五日印刷
同 年四月二十日發行

再訂正者 觀世清



發行兼
印刷者

檜 常



印刷所

江 川

堂

京都市上京區二條通越屋町角
東京市四谷區傳馬町貳丁目

